



被害状況(平成22年、鳥取県)



カシノナガキクイムシ



激害地の被害状況(平成22年9月、鳥取県)

カシノナガキクイムシとナラ枯れ

ナラ枯れは、体長5mmほどのカシノナガキクイムシが、ブナ科の樹木に穴をあけて侵入し、その体に付着したナラ菌が引き起こす伝染病です。

ナラ菌によって木の組織が破壊され、木は水を吸い上げられなくなって枯れてしまいます。

カシノナガキクイムシは6月から7月に成虫になると、周辺の健全木に飛んで行きます。この成虫の移動は10月まで続きます。

侵入した場合、急速に広がる恐れがあるので、早期発見・早期防除が非常に大切です。

被害地では「**第二の松くい虫**」と呼ぶ人もいます。

夏に紅葉したかのように見えるのも、被害の大きな特徴です。

しかし、カシノナガキクイムシに加害されても**枯れない木**もありますが、このような木は翌年の**被害の感染源**となります。

- 全国のナラ枯れ被害量は、被害量が最も多かった平成22年度をピークに減少傾向にありますが、一部で増加している地域もあります。
- 四国では、徳島県で平成27年9月に発生が確認されました。
- 本県ではまだ発生を確認していませんが、森林の緑を守るためには、早期発見が重要です。情報提供などのご協力をお願いいたします。